

3. 四季草花図屏風



「秋草図屏風」のうちの左隻



「花鳥図屏風」のうちの左隻



「秋草図屏風」のうちの右隻

四季草花図屏風 伝 狩野永徳

四曲一隻・二曲一双
紙本金地着色
(四曲) 本紙168.5×375.6
(二曲) 右隻本紙174.5×188.6、左隻本紙177.5×189.8
安土桃山時代(16世紀)

もとは、八条宮家創立当初の邸宅の襖絵。八条宮家は、初代智仁親王が豊臣秀吉の猶子となったこともあって、狩野永徳との関わりが連想されるが、本作品は、永徳の意を受け継いだ一門の絵師達による作品と考えられる。二曲一双屏風の両隻の間に、四曲一隻の屏風を挿入すると、菊花を中心とした四季の草花が描かれる一連の図様となる。可憐な草花が堂々と描かれるその描写には永徳様の画法が受け継がれていると言えよう。本展では、「秋草図屏風」二曲一双と「花鳥図屏風」四曲一双のうちの草花図の一隻をまとめて、「四季草花図屏風」として紹介する。旧桂宮家伝来品。

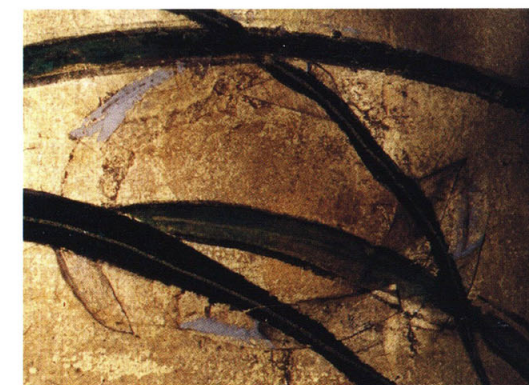
Flowers and plants of the four seasons Attributed to Kano Eitoku

Four-fold screen / Pair of two-fold screens
color and gold on paper
<Four-fold screen> 168.5×379.2
<Pair of two-fold screen> right 174.5×188.6 left 177.5×189.8
Azuchi-Momoyama period, 16th century

These screens were originally the *fusuma* (sliding doors) painting of the Prince Hachijo family when it was first established. Because Prince Toshihito, founder of the Hachijo family was adopted by Toyotomi Hideyoshi, the Hachijo family is associated with Kano Eitoku, and these works are considered to be by painters who inherited Eitoku's will. When the four-fold screen is placed between the pair of two-fold screens, it becomes a design of flowers and grasses of the four seasons with chrysanthemums in the center. Eitoku's style is succeeded within the majestic depiction of lovely flowers. In this exhibition, we will introduce the pair of two-fold screens, *Autumn grasses*, and the *Flowers and birds* among the pair of four-fold screens, *Flowers and plants of the four seasons*, together as one piece under the title, *Flowers and plants of the four seasons*. It was formerly owned by the Prince Katsura Family.



<参考> 「花鳥図屏風」のうちの右隻



「花鳥図屏風」左隻の引手跡

八条宮家(旧桂宮家) 伝来の屏風が語ること

旧桂宮家は、天正18年(1590)、正親町天皇の第一皇子・誠仁親王の第六皇子として誕生した智仁親王(1579～1629)のために創設された宮家である。智仁親王は幼少時から優れた才能を示し、50歳を過ぎても後継者に恵まれなかった豊臣秀吉が、一時、猶子に迎える程、注目された皇子である。そして、秀吉との関係が解消されて後、わずかに12歳であった皇子のために秀吉自身が宮家の創設を奏請して知行三千石を献じ、創設されたのが八条宮家である。名庭園として有名な桂離宮は、この八条宮家初代智仁親王、そして第二代の智忠親王の時に造営されたものである。学芸の才に秀でた二代の当主は、16世紀末から17世紀前半にかけての華やかな文化の担い手でもあり、その中心にあった後陽成天皇は兄、後水尾天皇は甥にあたる。八条宮家は、その後、常磐井宮、京極宮、そして桂宮と宮号を替えつつ、明治14年(1881)まで四親王家の一つとして存続した。

この宮家には多くの作品が伝来し、宮家廃絶の後にそれらは宮内省に移管されたが、その中、御物として保管された品々の中に、伝狩野永徳筆と伝える屏風類が残っていた。それらは、「源氏物語図屏風」が六曲一雙と二曲一雙の2件、「秋草図屏風」と称された二曲一雙の屏風が1件、「花鳥図屏風」と称された四曲一雙の屏風が1件である。これらは、絵具の剥落、画面の損傷、屏風骨の歪み、縁裂の脆弱化などにより、全体に疲労した状態であることから、早い時期に本格的な修理を行うこととした。

修理前から、それらは何らかの関連性があるであろうことは推察されたが、解体したことで、より具体的な考察が加えられ、創建時、あるいはそれから余り隔たらぬ宮家の初期、つまりは安土桃山時代から江戸のごく初期の宮家邸宅の襖絵の様子が判ってきたことは、大きな成果であった。

「源氏物語図屏風」においては、六曲一雙の右隻第6扇から左隻は、特定できない場面から「若紫」の場面へと連続しており、約2扇分と1/3が1単位の襖であったことが、引き手跡や擦れの様子から確認出来る。それぞれに襖に描かれていた画面を連続させる際に、両端や上下を裁断して継いでいることが、画面や引き手跡のズレから判断出来る。右隻第4・5扇は、一見、第6扇に連続するようであるが、異なる場面が継がれている可能性もあり、擦れ傷から襖絵であろうと考えられるが、引き手跡の部分は切断されている。また右隻第1・2・3扇の3面は、上が「常夏」、下が「野分」と推察される場面であるが、擦れ傷や継ぎの痕跡がないことから、壁面貼り付け画であった可能性が考えられる。二曲屏風については、場面は特定できないが、これもまた引き手跡が明確に襖だったことを物語っている。

一方の「花鳥図屏風」四曲一雙と「秋草図屏風」二曲一雙は別の作品として保管されてきたが、「花鳥図屏風」の片隻である草花図と「秋草図屏風」がもとは連続する画面であることが判明した。二曲の左隻、四曲、二曲の右隻と並べ置くと、花々が冬から春、夏、そして秋へと移りゆく様子が展開する。四曲屏風が、画題の異なるもの同士で右隻と左隻として組み合わせられ、一雙とされてきたことは、「花鳥図屏風」の片隻、水禽図にも同様の引手跡がある(21頁図版参照)ことから、この両隻が襖の表裏で仕立てられていたことを窺わせる。これらの屏風では、金箔の色や大きさ、一紙の寸法もほぼ同じであり、本紙が楮紙である点が共通していることもまた、同時期、同場所にそれらが存在していたことを窺わせる。

さらに、古い時期の唐紙の発見も、これらの伝来を探る上で興味深い資料となった(23頁図版参照)。「花鳥図屏風」の裏貼唐紙は、具引きした上に緑青による縦横の籬に金泥で菊唐草文を表したもので、その型には2種類が認められ、明らかに古い型による唐紙を摸して、後にもう一種類が制作されて部分的に貼り直されている。これは、この唐紙が特別な意味を持っていることを示唆していよう。そして、屏風の内側には、桐文様と青海波文様、菱花文様の3種類の別の唐紙が残されていた。このうち、桐文様については、桂離宮の襖に用いられるものとの共通性も考えられ、これら古様の唐紙は屏風絵と共に邸宅内の襖として使用されていたものである可能性も考えられる。加えて、過去の屏風裏張と見られる四菱菊唐草文と雀型文の2種類の唐紙も含まれていた。伝来を考察する上でも、唐紙の資料としてもとても興味深い。

こうした、秀吉の助力、狩野永徳が何らかの形で制作に関わったであろう八条宮家の邸宅の襖絵であった可能性のある屏風絵が、何時、襖から屏風に改装されたのか。その一つの重要な資料が、二曲の源氏図屏風の椽木に記された明暦2年(1657)の年記、また同屏風の下貼りの中に混在していた文書の寛永8年(1631)、同9年、承応3年(1654)の年記である。このうち、寛永9年正月の「金銀払方之帳」と承応3年正月の「台所万錢之帳」は表裏に記されている。また、椽木の明暦2年は、もともと墨書が書かれていた箇所を削ってその上に記されている。

以上の資料から考察すると、明暦3年に屏風として仕立てられていたことは確かであるが、これは既に屏風装になっていたものを下貼りから新しくして、仕立て直した時の記載と考えられる。その後は大きな修理はなく、痛みやすい裏の唐紙を2度、取り替えたと考えられよう。従って、平成の修理で発見された下貼文書は、明暦3年の修理時の時に用いられたものと考えられ、その中に寛永8・9年の年記があるので、

それ以前に屏風となっていたと考えることが出来よう。それは即ち、初代智仁親王在世のうちである可能性を示す。

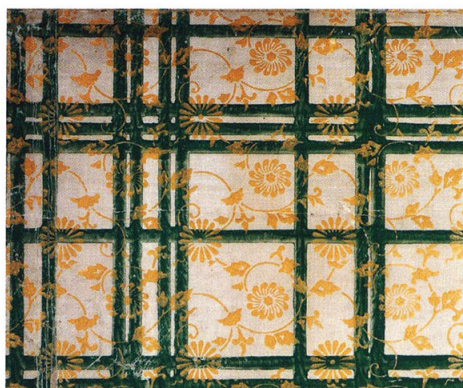
宮家の邸宅は、創設時の天正18年に禁裏の北寄に建てられ、慶長7年(1602)にはその屋敷内に茶屋や書院が建てられるが、その3年後の慶長10年には、内裏が北へ拡張されるにあたって今出川御門南東内側に屋敷替えとなり、翌年、新しい本邸に移徙。その3年後の慶長14年には屋敷内に新書院を建造している。また、離宮は、慶長20年(元和元年、1615)頃には古書院、寛永18年頃には中書院が建築された。こうした事情と、屏風の修理から得られた資料から考えれば、創建時邸宅の襖絵が屏風に仕立て直される契機は、慶長10年の内裏拡張に伴う屋敷替えであろう。わずか15年しか襖絵として使用されなかったからこそ、このように屏風に仕立て直しての使用が可能である、という考え方もできよう。

さらに、もう一点、付け加えておくべきことがある。それは、六曲「源氏物語図屏風」の縁裂(19頁図版参照)で、桐唐草文の見事な唐織が使用されている。このような唐織は、当時の最高級の織物であり、能装束や高貴な女性の表着として仕立てられるものである。それが『源氏物語』という女性的な画題と取り合わされていることを考えれば、この『源氏物語』の図様が展開された室は、宮家創建の天正18年12月23日、新御殿に共に移徙された母・准后勸修寺晴子、あるいはその翌年、13歳になった智仁親王が元服、そして式部卿に任ぜられたこの年に結婚した前関白九条兼孝の女(慶長9年没)がご

使用の女御の間で、その縁でいずれかの女性ゆかりの装束が使用されていることも、一つの可能性として考えることもできる。色合いや文様からは、准後の可能性があろうか。「秋草図屏風」や「花鳥図屏風」、さらには現在、東京国立博物館所蔵となり、本来はこれらの屏風と一緒に伝狩野永徳筆の伝来と共に旧桂宮家に伝来してきた国宝「繪図屏風」(八曲一隻)が、もともとは襖絵であったことから縁裂を付けない状態で伝来してきたことから考えれば、この「源氏物語図屏風」の縁裂を伴う仕立ては特殊であり、その点も加味した上で、これらの屏風の制作時期、襖絵から屏風への改装時期、伝来を考える必要がある。

国宝「繪図屏風」は、旧桂宮家の家司が書き継いだ『桂宮日記』元禄13年(1700)2月21日条に登場していることから、この時期には屏風として成立していたことが判明するが、皇室に遺された一連のこれらの作品の修理によって得られた資料から、屏風としての存在時期はもっと早かったことが確実に判明したのである。

これらの屏風の修理によって、16世紀末、豊臣秀吉や狩野永徳という時の覇者が関わって制作された邸宅内の襖絵の様子が、より具体的になったことは、大きな収穫であったと当時に、江戸初期まで遡るであろう唐紙の資料も加わったことは、きらびやかなこの時期の文化の様相を、さらに豊かにしてくれた。



「花鳥図屏風」の旧裏貼の唐紙(古い型のもの)



同上(上図版よりは時代が下がるもの)



屏風内部から発見された桐文様の唐紙



同上 青海波文様の唐紙



寛永8年の年記のある下貼り文書

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

開館20周年記念
美を伝えゆく 一名品にみる20年の歩み―

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成25年10月12日発行

© 2013, The Museum of the Imperial Collections, Japan

The 20th Anniversary Exhibition of the Sannomaru Shozokan
Passing Art works to the Future –The Museum's 20 Years of Research on Masterpieces–

Edited by the Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan

Produced by Tokyo Bijutsu Inc.

Translated by Hiroko Kurokawa

Published by Imperial Household Agency

Issued on October 12, 2013

© 2013, The Museum of the Imperial Collections, Japan